

干支は兄弟（えと） —えとの話

えとは「干支」と書きますが、これは「十干十二支」を略したいいかたです。「え」は「兄」を意味し、「陽の気」を、「と」は「弟」を意味し「陰の気」をあらわし、「阿・吽」と同じような意味をもっています。

その昔、唐の制度を移入して国家経営をしようとした律令時代には、さまざまな占いをもとに、「政事（まつりごと）」の日取りや吉凶を予知する、今でいえば内閣府と気象庁を合わせたような「陰陽寮」という役所がありました。そこには「暦博士」という役人がおり、陰陽五行説と天体の運行を元に暦をつくっていました。「聖」と書いて「ひじり」と読みますが、その語源は「日知り」であったそうで、当時暦をつくることは最高の知的作業であったことが窺えます。

その後、律令制の崩壊とともに「陰陽寮」の知識は民間に流れ、仏教や神道や修験道と接触しながら「陰陽道」といわれる学問体系として伝えられてきました。手相、人相、家相、姓名判断などの根拠ともなり、今はやりの風水の思想も含まれています。

さて五行思想にもとづく世界の構成要素である「木・火・土・金・水」をそれぞれ「陽」と「陰」の性格に分けたものを「十干（じっかん）」（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）といいます。古代の中国では月の満ち欠けに要する三十日を一月とし、それを三等分した十日を「旬」としてこれに「十干」をあてはめていたようです。ちょうどキリスト紀元の今の暦が七日を「週」とし「曜日」を設定しているのと同じです。

また十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）のうちひとつおきに「子・寅・辰・午・申・戌」は「陽」に分類し、「丑・卯・巳・未・酉・亥」は「陰」に分類し、「十干」と組み合わせることによって十と十二の最小公倍数である六十通りの「干支」ができあがります。「木」を「陽（兄）」と「陰（弟）」に分けると「木の兄（きのえ）＝申」「木の弟（きのと）＝乙」となります。こうすると「甲子」を「きのえ・ね」などという不思議な読み方も理解できます。

十二支という数字は、十進法が中心の暮らしからはもうひとつぴんとこない数字ですが、昔から世界中で用いられてきました。そのもとになっているのは、月の進行を基準とする「太陰暦」でしょう。「太陽暦」で暮らしていると、一月、二月の「月」が無意味になりますが、太陰暦では月の満ち欠けを十二回くりかえすと季節がほぼ一巡しますから、「十二」という数はとても重要であったのです。

一年を三百六十五日に統一した暦がなかったころは、月の満ち欠けを数えることと、太陽の midpoint の高さを知ること、一年のなかでの「今日」を特定していたのでした。

明治になるまで用いられた「旧暦」は、月の運行太陽の恒転周期とのずれを「閏月」を設けることで調整していたようです。一見複雑に思えるこの暦も、月と季節の整合性の面で東アジアの農事暦として用いるには、西洋起源の太陽暦より適していたと聞きます。

十二支という数字にかこまれた仏像というと、薬師如来があります。仏教がもたらされ

てまだ日も浅い奈良時代のひとびとにとって最大の恐怖と苦しみは病でした。そこでそれに対する救済の功德をもたらす薬師如来を祭った大寺院がいくつも建立されました。今日も医療機関の建設が社会的にきわめて重要な事業であるのとなんら変わりはありません。

奈良の薬師寺や新薬師寺のすばらしい諸仏が当時のひとびとの薬師信仰の強さを十二分に伝えています。仏教の経典では、さまざまな如来を釈迦のような実在した人物であるかのように描いています。

薬師如来も、インドの王子として生まれながら衆生救済のために出家し、十二の大誓願を立てて苦行をします。そして、その誓願をみごとに成就して仏界の東方に浄瑠璃国を建設しました。仏教は日本にもたらされたころにはとても穏やかで完成された宗教でしたが、発祥の地であるインドではさまざまな神々を調伏帰順させながら勢力を伸ばしていった歴史があります。ですから経典にかかれた仏たちは大願成就を妨げようとする仏敵や悪魔に対する強力な戦闘集団をもっています。薬師本願経にはインドの十二の荒ぶる神々がおのおの七千の眷属を従えて薬師如来の分身として甲冑に身を固めて昼夜十二時、四季十二ヵ月絶えず衆生を護持し給うと説かれています。

十二支の動物たちは古代インドの宇宙に由来します。それに触れた「大集経」には、「閻浮提（えんぶだい）」の南方海中には瑠璃山があり、その山にある三つの洞窟には蛇・馬・羊が住んでいる。（中略）東方海中には金山があり、なかには三つの洞窟があつて獅子・兎・龍が住んでいる。この十二の獣たちは閻浮提堤内で交代につねに行動している」とあります。

十二種類の動物がうろついているという「閻浮提」とは、人間界のことだそうです。

なるほど、私のまわりの人物たちの印象は、その人の「えと」の動物と不思議に一致しています。あなたのまわりはいかがですか。

求龍堂 「開運 楽観堂のすすめ」より